

“関心”は記憶につながる

“記憶”の原理は“関心”の一語に尽きると思います。記憶力の旺盛な幼児たちは、関心をもって見るものは、すべて記憶にとどめずにはおきません。

私は、子供たちに「漢字を覚えなさい」とは言いませんでしたが、お話の間に、黒板に書きつけられる漢字に、関心がいだかれたので、子供たちはこれを覚えてしまったのです。

ところで、子供たちは、漢字を覚えることによって何か失うものがあるのでしょうか。“無努力”“無負担”で覚える子供たちは、漢字を覚えることによって失われるものは、何もありません。それは、昔、ただ海に注ぐのに任せていた川の水を、今、発電に利用していますが、電気を起こしたからといって、水は何も失うものがないのと同じです。

電気を起こしただけ完全なプラスであるように、お話を聞きながら漢字を覚えることは、漢字を覚えただけ、完全にプラスになるわけではありません。

この漢字教育によって失われるものが何もなく、漢字を覚えただけプラス……しかし、ほんとうはそれだけのものではありません。

いわゆる“六領域”にわたる幼児の教育指導を、漢字で指導することによって、今まで以上の教育効果が各領域で得られる、そこに石井方式の価値があるのです。

「石井方式で漢字が覚えられたとしても、六領域にわたる幼児の活動が犠牲にされたのでは何もならない」と言って、石井方式を非難する人がありますが、これは石井方式の実際を知らない、全般的のはずれた非難です。

子供たちにお話を聞かせるのに、ただ耳だけに訴えて聞かせるよりも、漢字を見せながら聞かせたほうが、ずっと子供の注意を集めることができることは、先刻の事実が何よりも証明していると思います。

私はそう言って、あとで述べるような“歌唱指導”や“絵画指導”の実例をあげて、園長先生に説明しました。そして、「“石井方式・漢字教育”というものは、このように良いことづくめで、しかも、指導する先生にも、指導を受ける子供たちにも、少しの負担もかからない学習法です」と言って、この長い説明を結びました。

かくして、初め猛烈に反対していた園長さんは、幼児の実際の活動を通して、その真実の姿を自分の目で確かに見届けますと、一転して“漢字教育”の礼賛者となり、熱心な実践者となったのです。